

ゼニガタアザラシ  
*Phoca kurilensis*

# 忘れられた動物

—ゼニガタアザラシの実態—

新 妻 昭 夫

オホーツク海は世界的にアザラシが豊富な海域の一つであり、北海道近海では五種類のアザラシが見られる。アザラシ

という名前を知らない人はなく、比較的なじみの深い動物のようだが、その実態はほとんど知られていないように思われる。たとえば、北海道の沿岸に一年中定着し、春に海岸近くの岩礁上で仔を産むアザラシがいる。このことを知っている人が、どれだけいるだろうか。そういう私も、今春ひょんなことからアザラシのことを調べはじめたまで、アザラシは流水に乗ってやってくるものとばかり思っていたのである。ところが一方では、大規模な商業的アザラシ猟獲が行なわれており、毎年三千頭のアザラシが北海道で捕獲され、主として土産品用の細工物と毛皮コートに利用されている。このように一般認識が乏しく一方では商業猟獲が行なわれているという状況のなかで、最近アザラシ類の生息数が減少しはじめ、とくにゼニガタアザラシという種類が絶滅の危機に陥っている。アザラシを調べはじめた一年にも満たない私が筆をとったのは、このためである。今年の春先からアザラシの主生息地である道東に何度か出かけた。ハンターや毛皮屋さんのところへ通って標本材料を分けてもらいながらいろいろ話を聞いていたのだが、そのうちにもう奇妙なことに気づいた。というのは、ゼニガタアザラシは毎年二五〇頭近く捕獲されている。それに対してハンター諸氏の見積っている生息数を全部合計し

てもせいぜい四〇〇頭にしかならないのである。不思議に思った私がハンターらにたずねてみると、千島からの補給があるので少しぐらい獲りすぎても大丈夫だというのである。この言葉を聞いたときにはそうですかと軽く受けとっていたのだが、その後調べが進んでいくうちに、これは大変なことであることがわかってきた。このアザラシは千島列島と北海道に限産する種類で、千島列島全体でさえソ連の調査によれば二千頭しか生息していない貴重なアザラシなのである。

ことの重大さを確認したのは、繁殖島の調査を行なった結果である。ゼニガタアザラシは五月に岩礁上で出産し、北海道の繁殖場所として四個所が確認されている。五月にその一個所のモユリ島に渡って見たところ、親仔と他に一頭の合計三頭しか確認できなかったのである。この島では毎年三〇頭くらい生まれるという話を聞いていたのだが今年出産が確認されたのは結局一頭だけということになってしまった。ゼニガタアザラシは北海道沿岸の繁殖場所を放棄しはじめているのであり、このことは北海道沿岸からこのアザラシが姿を消すのが、そう遠い将来ではないことを示している。

このような結果を招いた原因は一言でいえば「乱獲」なのだが、状況を検討してみると、ゼニガタアザラシの特異な生息とゼニガタアザラシ猟獲の特殊な形態との相乗作用によって、最悪の事態が生じていることがわかる。さらにこのような事態を生み出す社会背景があることを指摘せねばならない。以下、順を追って少し詳しく述べてみたい。

一般に海獣と呼ばれる海に住む哺乳類には、海牛類、鯨類、鰭脚類がある。海牛類はマナティーやジュゴンなどで主として南方に分布し、北海道には縁がない。かつては北太平洋の唯一の海牛類として、コマンドー諸島にステラー海牛と呼ばれる体長七m余り、体重約三トンという巨大な海牛が生息していた。この動物は一七四一年にペーリングの探検隊によって発見された後、肉や脂肪を目的として乱獲され、わずか二七年後の一七六八年に絶滅してしまった。

鯨類は最近、資源の減少と保護の問題が論議されている。クジラの鳴き声のレコードとそれに対する業界の反論はさておき、TVで放映されたクストー船長のフィルムを見て、大洋を悠々と泳ぐザトウクジラの姿に感動した人は多いだろう。いままでカン詰でしか知らなかったクジラ達が、海で生活している姿そのままで食卓の話題になるなんて、こんな素晴らしいことはない。鯨類は外洋での生活にもっとも適応した哺乳類で、採餌、出産、哺育まですべて海中で行なうことができる。

鰭脚類と呼ばれるグループにはセイウチ科、アシカ科、そしてアザラシ科が含まれる。これらの動物は鯨類ほど海上生活に適応しておらず、主として沿岸帯に生息し、採餌はもちろん海中で行なうが、繁殖や休息のために陸上や水上にあがる必要がある。アシカ科のうち現在北海道近海で見られるのは、国際条約で保護されているオットセイと漁業被害が問題となっているトドの二種類である。両種ともコマンドー諸島や千島などで繁殖し、北海道へは採餌のために回遊してくる。これらに近縁なものにアシカがあり、比較的最近まで日本沿岸で繁殖していたことは確かなのだが、その実態を知られることなく絶滅してしまい、日本には標本すら残っていない。

さて本論に入ろう。北海道近海で見られるアザラシにはゴマフアザラシ、クラカケアザラシ、フイリアザラシ、アゴヒゲアザラシ、そしてゼニガタアザラシの五種類がある。ハンターや毛皮業者はそれぞれバオイ、アラハ、コンコリ、アムスベ、クロ(クロフ)と呼んでいる。はじめの四種はオホーツク海から北太平洋一帯に分布し、フイリとアゴヒゲアザラシは北極海から北大西洋にも分布する。ゴマフアザラシはもっともよく知られたアザラシで、三月に流水上で出産し、他の時期は沿岸に近寄り、尾岳沼や風連湖の砂州上で休息しているのが見られる。北海道沿岸に近寄るゴマフアザラシの数は、

ひと昔前にくらべてかなり減少したといわれている。背に鞍状模様のあるクラカケアザラシ、小型のフイリアザラシ、大型でヒゲの長いアゴヒゲアザラシは四月に流水帯、あるいはもっと北方の水上で出産し、北海道近海には流水期だけやってくる。クラカケアザラシはかつては数の少ない稀らしい種類とされていたが、ゴマフアザラシに次いで捕獲数が多い。フイリとアゴヒゲアザラシは北海道近海には少数しか姿を現わさず、とくに後者は年間数頭しか捕獲されていない。

ゼニガタアザラシは一九四二年に北大の犬飼哲夫名誉教授によってはじめて学会に発表された種類で、黒地に白色の穴あき銭状の模様があるところから、ゼニガタと名付けられた。前者四種が主としてオホーツク海側に分布するのに対して、ゼニガタアザラシは太平洋側に分布し、一年中沿岸に定着して生活する。出産は五月に海岸近くの岩礁上で行なわれ一産一仔である(流水上でなく岩礁上で出産することが、この種のもっとも顕著な特徴)。このアザラシの分布が確認されているのは千島列島と北海道の限定された地域だけで、北海道のエリモ岬が分布南限となっている。生息数は少なく、千島列島全体でも約二千頭が確認されているにすぎない。北海道の生息数は、各地のハンター諸氏の推定数を合計すると四百頭となる。しかし何人かの研究者の調査ではそれぞれの地域で約半数程度しか確認されておらず、北海道の全生息数は、おそらく三百頭前後と思われる。ゴマフアザラシが六万頭(オホーツク海のみ)、クラカケアザラシが十八万頭(オホーツクおよびベーリング海)、フイリアザラシが百万頭(同上)と推定されている。これらに比較すればゼニガタアザラシの二千数百頭という生息数がいかに少ないものか一目瞭然であろう。

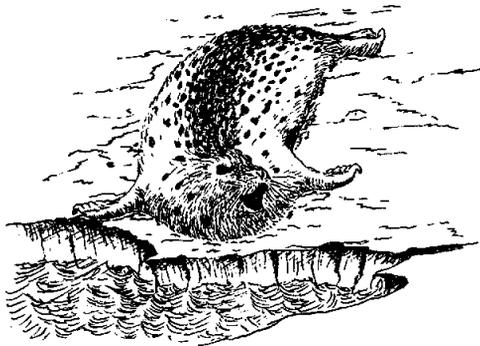
分布域が局限され生息数が少ないことは、繁殖場所が限定されていることと関連がある。他の流水上で出産するアザラシ類は、流水帯という広大で外敵の少ない繁殖場所を持つている。それに対して、ゼニガタアザラシが産する岩礁地帯は狭く、外敵に対して無防備で神経質な妊娠雌が、安心して出産できるような場所となるときらに限られてくる。北海道で現在確認されている繁殖場所はモエリ島、初田牛海岸、大里島、エリモ岬の四個所だけで、いずれも無人島や海岸から離れ、人目につかない岩礁である。数年前までは根室半島から厚岸湾にかけて他にも数個所の繁殖場所が知られていたが、いまではゼニガタアザラシがほとんど寄りついていない。現在利用されている繁殖場所も

放棄されつつあるが見え、モユリ島での個体数調査結果は一九七一年七五頭、一九七二年四一〜五二頭、一九七三年三一〇頭と急激な減少カーブを描いている。実際、ハンター自身も北海道沿岸で出産する個体が少なくなったことを認めているのである。

前述のようにアザラシ猟はわゆるスポーツ・ハンティングではなく、商業猟として行われており、年間約三千頭が捕獲されている。その大部分はオホーツク海方面のゴマアザラシとクラカケアザラシで、数十トン級の船が樺太近海まで出漁している。太平洋側のゼニガタアザラシ猟では一〜二トンの船で年間約二五〇頭が捕獲されている。ゼニガタアザラシは、数字のうえでは小規模に見えるかも知れない。しかし決してそうではないことは、前述したこの種の特異性（分布が限定され個体数が少ない）から理解されるだろう。

アザラシ猟には散弾銃あるいはライフル銃が用いられ、揺れる船上から海上のアザラシを撃つには、かなり熟練した技術が必要とする。ゼニガタアザラシはほとんどが漁民の副業として行なわれ、毎年かなりの頭数を捕獲する、いわばセミ・プロが数人いる。副業とはいえ、毛皮業者への引き渡し価格が一頭平均一万余千円なので、三〇頭捕獲すれば四〇万円の収入になるものと思われる。主な猟期は出産期の五月からはじまり、昆布漁が開始される六〜七月までつづけられる。また昆布漁の終わった秋と冬にも若干捕獲されている。

ゼニガタアザラシの問題点の一つは、獲りすぎにある。北海道沿岸に生息する三〇〇頭のうちの二



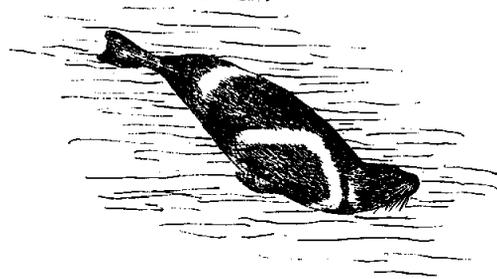
ゴマアザラシ *Phoca largha*  
(ゼニガタアザラシ以外 4 種は  
Gromov et al (1963) 原図ヨリ改写)

五〇頭を捕獲すれば、どういふことになるか。このような過度の捕獲がいままでつづいてきたのは、千島からの補給があるためとしか考えられない。ソ連は千島列島のゼニガタアザラシを一切捕獲していない。北海道におけるゼニガタアザラシの実態をソ連はまだ知らないらしいが、いづれ国際信義上の問題となるのが容易に予想される。

もう一つの問題は捕獲が一時期（五〜六月）に集中することで、この時期は繁殖期とちょうど重なる。これは偶然の一致ではなく、新生児の毛皮の市場価格が高いことの必然の結果である。また出産後一〜二カ月の授乳期間は親仔が一緒にいて、動作がノロイので容易に捕獲できる。実際、毛皮業者の入荷統計を見ると当才仔が六割程度を占め、残りの大部分は雌獣である。私が大学や博物館に所蔵されている標本約二百個体の年令査定をした結果でも、当才仔の割合が六五％であった。

このような無差別乱獲自体だけでも重大なことだが、もっとも恐れなければならぬのは、その結果による繁殖環境の破壊である。ゼニガタアザラシの出産に適した岩礁地帯は限られている。そのような場所で繁殖期に親仔を集中的に捕獲することが、繁殖率に影響を与えることは明らかである。研究者の調査活動ですら繁殖を妨害し、雌獣を繁殖場所から遠ざけ仔の死亡率を増加させたという結果が、ヨーロッパのハイロアザラシで報告されている。まして現在北海道で行なわれているような猟獲状態がつづけば北海道の繁殖場所が完全に放棄されること、近い将来に予測される。前に述べたようにすでに放棄された場所があり、残った四個所も繁殖個体数が急速に減少しているのである。

以上に述べてきたようなことで、ゼニガタアザラシとはどんな動物か、そして現在どんな状態にあるのか理解していただけたことと思う。最後に、このような深刻な状



クラカケアザラシ  
*Histriophoca fasciata*



フイリアザラシ

*Pusa hispida*

態を生み出した社会的背景について問題を提起しておきたい。

アザラシ(海獣類一般についてそうなのだが)に関する一般認識があまりにも不足していた。その結果、現在アザラシおよびアザラシ類に関して適切な指導を行なうべき行政機関がない。このことを、もっとも強調しておかねばならない。つまり、アザラシは海に住んでいるという理由で狩猟法の対象から外され、一方、水産関係官庁からは漁業の対象でないため無視されている。このことはアザラシが放置されていることだけでなく、アザラシ類を野放しにしていることでもある。法律の谷間にあつて、人知れず絶滅しようとしているのがゼニガタアザラシであるといえよう。

現在、アザラシ類はトドと一緒に「狩猟法以外の有害鳥獣」(銃刀法)とされている。したがってアザラシ類を行なう人が銃の所持許可を受けるときは、狩猟法以外の有害鳥獣駆除を用途として申請する。その許可基準は事業に被害を受けている者、あるいはそのような者から委託された者とされており、現在許可されている多くの場合は、漁協から委託を受けた人たちである。このこと自体は何も問題ではなく、漁業被害を妨ぐ目的からむしろ当然といえるだろう。しかし、被害程度を査定する基準はなく、しかもトドと五種類のアザラシを一括して「トドなどの有害海獣」と総称(ただし、国際保護獣のオットセイとラッコは除外)していることは納得できない。たしかに銃刀法は、動物の保護や捕獲規制を目的とした法律ではない。しかし現実には「トドなどの有害海獣駆除」を名目として、天然記念物級の貴重な動物であるゼニガタアザラシの商業猟獲がなかに公認されている、といつても過言ではあるまい。

欧米諸国では古くから海獣の毛皮が珍重され、商業猟獲が行なわれてきた。そのためオットセイやラッコが一時絶滅に類し、国際条約によって保護されたことはよく知られている。アザラシ類の場合も同様で、一時乱獲の影響が心配された種もあったが、すでは十分な処置がとられてきているようだ。現在、毛皮資源として利用するものについて



アゴヒゲアザラシ

*Erignathus barbatus*

は捕獲頭数制限、繁殖期の捕獲禁止、雌獣および仔の捕獲禁止などの対策がとられている。また、生息数の少ない貴重な種については、全面的に捕獲を禁止したり、繁殖場所を保護区に指定するなどして厳重に保護している。いずれの場合でも、軽飛行機や大型調査船による個体数の算定や、標識などの方法による生態調査が行なわれており、合理的な個体群管理の努力が払われていることに注目したい。

い の だ か ら、問 題 は 一 層 深 刻 だ ー とい わ ね ば 不 然 だ ー

◇

ゼニガタアザラシは、アシカを絶滅させてしまった現在、日本で繁殖する唯一の海獣である。このアザラシは生態的に特異な種であり、分布も生息数も限られている。これらのことからだけでも厳重な管理下において保護すべき貴重な存在である、と結論し得る。しかるに今日までその存在を認識されることなく、野放しの猟獲のために日本から姿を消そうとしている。緊急に、ゼニガタアザラシの捕獲を禁止あるいは制限し、同時に繁殖場所を確保する必要がある。ゼニガタアザラシとその他おかれている現状について、会員諸兄のご理解を期待する。

(注) フイリはワモンアザラシ、ゼニガタはチシマアザラシと呼ばれることもある。

(北大・水産学部水産増殖学科学生)